

の所見であった。その後、左鼠径部にも触知可能なリンパ節転移を認めた。同部の疼痛と下肢のむくみによる歩行困難が出現したため、患者本人と家族に細胞株樹立を含む十分なインフォームドコンセントを得た上で左鼠径リンパ節を摘出した。病理組織像は SCC であり、原発の膀胱癌組織像と酷似していた。摘出転移リンパ節組織を無菌的に採取し、細胞分散法により初代培養を開始した。10%FBS を含む RPMI 培地にて静置培養した。in vitro では 10 回以上の継代培養が可能であった。これをヌードマウスの皮下に移植を行い、他種移植増殖能を検討した。

【結果と考察】 膀胱扁平上皮癌由来細胞株 (TMUU-08) の樹立に成功した。また TMUU-08 はヌードマウスの背部皮下移植において良好な造腫瘍能を有した。マウスより摘出した腫瘍の HE 染色像は組織学的に SCC であり、免疫組織染色においても SCC 染色は陽性であった。膀胱由来の扁平上皮癌細胞株の報告は極めて少なく、本細胞株は膀胱扁平上皮癌の新たな治療戦略開発において有用な細胞株と考えられた。

(本研究は平成 20 年度東京医科大学研究助成金による。)

P3-48.

外用抗真菌薬ルリコナゾールの *in vitro* および *in vivo* 抗真菌活性

(専攻生・皮膚科学)

○古賀 裕康

(皮膚科)

坪井 良治

ルリコナゾール (LLCZ) は、化学構造面でジチオラン環を有することを特徴とする光学活性なイミダゾール系抗真菌薬である。幅広い抗菌スペクトルを有し、特に糸状菌に対して強力な活性を示す。本邦では外用抗真菌剤として開発され、現在クリームおよび液剤が白癬、皮膚カンジダ症および濼風に適応されている。我々は、LLCZ の臨床効果を裏付ける実験的根拠を得ることを目的として *in vitro* および *in vivo* で抗真菌活性を検討した。

In vitro: 白癬菌 (*T. mentagrophytes*, *T. rubrum*, *T. tonsurans*) およびカンジダ (*C. albicans*) に対する最小発育阻止濃度 (MIC) をマイクロ液体希釈法で測定し、既存外用抗真菌剤 (5 系統 9 剤) と比較した。

LLCZ の白癬菌に対する MIC は $\leq 0.00012 \sim 0.002 \mu\text{g/ml}$ と極めて低く、テルビナフィン (TBF) をはじめとする比較対照薬の中で最強の活性を示した。LLCZ はカンジダに対しても他イミダゾール剤と同様に高い活性を示し、MIC は $0.031 \sim 0.13 \mu\text{g/ml}$ と低かった。*In vivo*: 1% LLCZ クリーム (1 日 1 回塗布) の治療効果をモルモットにおける体部および足白癬モデルで調べ、1% TBF クリームと比較した。1% LLCZ クリームはいずれのモデルにおいても強い活性を示し、対照薬剤より短い塗布日数で優れた皮膚症状改善ならびに真菌学的治療効果を示した。角層中薬物動態をモルモット足底において調べたところ、1% LLCZ クリーム塗布部位の角層中薬物濃度は 1% TBF クリームより高かった。さらに *ex vivo* では角質に吸着した LLCZ は TBF と比較して遊離しやすく、外用薬として好適な薬物挙動が観察された。

以上、ルリコナゾールは強力な抗真菌活性に加えて、良好な角層中薬物動態を有することで、短い投薬期間で優れた治療効果を発揮すると考えられた。

P3-49.

総合診療科における新規 HIV 感染症患者の動向—初療医が HIV 感染症を鑑別に挙げる時代—

(総合診療科)

○赤石 雄、遠井 敬大、榎本 年幸

関 正康、小宮 英明、原田 芳巳

平山 陽示、大滝 純司

【緒言】 近年、HIV 感染症に対する治療は大きく変わり、AIDS と診断されても免疫力の回復が期待できる症例も増加してきている。感染拡大防止の意味からも社会的に啓蒙運動も盛んになってきた。当科において HIV 感染症と初めて診断される患者数も年々増加傾向にあるため、東京都および全国との新患者報告数と比較調査した。

【対象と方法】 当科に受診した新患者 2006 年度 9,856 人、2007 年度 9,369 人、2008 年度 4,655 人 (2008 年 4 月～2009 年 2 月) について検討した。当科で HIV 感染症と診断された患者数と東京都および全国の患者報告数との比較をし、診断に至るまでの過程 (主訴、面接内容、担当医の推論) を診療録により検討した。